
かみさまの涙

dear*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かみさまの涙

【Nコード】

N6437G

【作者名】

dear*

【あらすじ】

「かみさま、僕を愛して。」愛を知らない少年と、少年を愛する少女の危うくて切ない恋。好きな人が居るから泣いてしまうの。でも、それって悪い事じゃない。愛を探すから傷つくの。でも、それは仕方のない事な気がする。何もわからなくて、何かを知るには幼くて。それでも必死に、生きて居るんだ。「ねえ、かみさまのかみさまは何処に居るのかな。」

プロローグ（前書き）

少し精神的なお話になっていきますので苦手な方はご注意ください。

プロローグ

其れは、遠い空を見つめる瞬間と似ていた。届く様で届かなくて掴める様で掴めない距離は、涙が出そうな位に単純で明確だった。

中学入学と同時に、私・御剣夜兎と彼・真宮望の運命は奇しくも紡がれた。瞳が合った瞬間に、私達の世界は自身と相手のみになった。其れは、恋と類似した何かだった様に思う。彼と出逢った時私の鼓動は早まり、心臓を壊してしまうのではないかと心配してしまう程だった。

運命だ、と瞬間的に直感が働いた。其れまでの私はそんな不透明で不明確な存在を信用等していなかったけれど。私が私で在り、彼が彼で在る事を幸福に感じていた。きっと彼もそうだったに違いない。

何故なら、私達の関係はその頃から始まったのだから。しかしながら、私と彼の心は全くの一方通行。私の恋と彼の愛は、同じ意味を為さなかった。

私は彼のかみさまで、彼は私のピグマリオンなのだ。

「はじめまして。」

ふわり、優しく愛らしい暖かな笑みを浮かべた彼は、突如握手を催促して手を差し出してきた。ドキリと胸が鳴り、弱々しく手を握ると彼は恥ずかしそうに笑った。

「みつるぎさん、」

「何？」

「あなたはきつと、ぼくのかみさまです。」

不意に感じた温もりに一瞬頭が追いつかなかった。視界を掠めたハニーブラウンのふんわりとした髪。抱き締められた瞬間私は彼の泣き顔を見た。澄んだ雫はあまりの美しさに目眩を感じさせた。

私はきつと、彼から離れる事が出来ない。其れはあまりにも不確かである筈なのに、その時の私はそれを当然の如く確信していた。

震える肩を抱き締め、雫を拭い笑って見せると、彼は未だ濡れたままの切な気な眼差しで私を見つめた。

「かみさま、」

再び泣き出してしまいそうな様子の彼に、苦笑いした。

「ぼくをあいして。」

その声は、まるで慈悲を乞うかの様に切実な響きを持っていた。

彼は、何を願っているのだろうか。

何を想い囁くのか。

泣き出してしまいそうな彼に、その日私は愛を願った。彼の幸福はきつと、私が彼を愛する事にあるのだ。其れは決して恋とは違う想いであるのは解ったのだが、彼の求める其れが一体何であるのか私にはその答えを把握する事が出来ないうでいた。それでもただひたすらに、私は彼に恋と近い想いを抱いている事だけは確かだった。だからきつと願ってしまうのだ。

私が彼のかみさまで在り続ける事を。

私のこの想いを、彼に悟られない事を。

嗚呼、神様。

幸福とは、何処に存在しているのでしょうか。

私と、彼の、始まり。

第1話

四月の空が花吹雪で桜色に染まる。ぼんやりと空を見上げたていた夜兎は、視界に入ってきた其の幻想に目を細めた。

校門の隣に植えられた桜は、入学式の終わりと共に時が動き出したかの如く散っていく。何と無く、其の様が切ないものに感じたのは今日の出逢いが余りにも衝撃的だったからだろうか。あの少年の涙と眼差しと想いの錯誤。愛して欲しいだなんて、まるで母に縋る子供の様に震えていた。

そんな彼に好意を抱いた自分自身を、彼女は小さく嘲笑する。そうしてはあ、と溜め息を吐くと再び歩みを進める。

通学路であると言うのに、其処には夜兎以外誰も存在しない。ほんの少しだけ世界の中に独り取り残されたかのように錯覚する。

「友達、出来るかなあ。」

望との劇的な出逢いを遂げたは良いが、其れが周りの人間からは好奇の目で見られているようだ。更に言ってしまうえば、友達を作る為に躍起になるクラスメートや早速と言わんばかりに夜兎と望の関係に噂話をし始める彼女等の中で、自分だけが取り残された気がした彼女が入学式後のHRが終わった途端逃げる様に教室を出たのがそもそもの問題だろう。

夜兎は、ざわめく教室の中で質問攻めにされ困った様な顔をしていた望を思い出して苦笑いを浮かべ、今更ながらあの輪の中に入れば良かったかと少しだけ後悔した。

「御剣さん！」

突如、背後から腕を引かれ視界に入る望の姿。どくん、と心臓が脈を打つ。それと同時に彼女は、先程まで女の子達に引つ張りだこだった彼が何故此処に居るのかと頭の中で疑問を浮かべた。

「どうしたの？」

「居なかったから。」

「え？」

「教室に、御剣さんが、居なかったから。」

少し淋しそうに表情を曇らせてから、望は夜兎をジッと見つめる。其の澄んだ瞳に再び心音が早まるのを感じながら、其れを隠す様に彼女は苦笑いを浮かべた。彼女の腕を掴んでいる望の手にほんの少し力が込められる。

今にも泣き出してしまういそうな彼に、彼女はどうしようもなく愛を感じた。

「ごめんね、真宮くん。」

直毛の夜兎とは対照的にふわふわの柔らかいような望の髪を慈しむ様に彼女の手が撫でれば、腕を掴む力は自然と弱くなる。

其れは、安心からなのか。其れとも、望が夜兎自身を“かみさま”だと思っているからなのか。どんなに考えても、行き着く答えは後者しか有り得はしないのだと彼女は小さく息を零した。

「御剣さん？」

「私、人が沢山居る場所が苦手なんだ。」

だからごめんね、ともう一度望へと謝罪し撫でる手を止め再び歩み出す夜兎。彼女の笑みが何と無く痛々しくて、望はその場に立ち尽くした。

そうしてから、自らの行動は彼女にとって凶だったに違いないと深く胸中を痛ませる。この先も続く学園生活の中で、自分の存在が彼女の重荷の様に感じた。

「御剣さん、」

小さく小さく、その背中へ呟く望の声。

未だ歩み続ける夜兎に、望は行き場をなくし辿り着く場所のないその声が、今の彼自身の様に感じて泣き出したい衝動に駆られた。

「真宮くん、」

瞬間、不意にかけられた柔らかい声。

俯いている望の視界には、新入生特有の真新しいローファーと紺色のソックス。

彼女だ。そう感じた瞬間、ふわりと包まれる甘い香りと優しさを帯びた温もり。

不意に枷が外れた気がした。

ポロポロと止まらない雫に、彼はどうしようもなく愛しさを感じていた。

「アイシテル。」

紡ぐ声は、春の風に吸い込まれる。

散る桜に馳せた想いは、何処で満ちるのか。頭の奥でふと、思ったが彼女には何もわからなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6437g/>

かみさまの涙

2010年11月12日01時53分発行